

関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」について

— 大形丁字頭勾玉出現の一試考 —

徳田 誠志

一. はじめに

みなさんは、勾玉をご存じであろうか。一般的なイメージはコンマのような形をした玉の一種であり、古墳時代における首飾りの一連をなすものとして、その姿を思い浮かべる方が多いであろう。実際、人物形埴輪には勾玉を伴う首飾りが表現されたものもあり、古墳時代後期の横穴式石室を発掘すれば数個の勾玉に出会うことも稀ではない。

さらには湾曲した形をした玉ということであれば、縄文時代から弥生時代を通じても装身具として用いられており、勾玉は日本人にとつてはなじみのある形であるといっても過言ではなからう。現代にあつても「パワーストーン」の名のもとに、繁華街の店頭で見かけることも少なくない。そして考古遺物としての材質は、石、ガラス、骨・牙、土（粘土）などさまざまである。また、その祖形についても動物の牙、あるいは胎児などいろいろと想定はされているものの結論を見ない。

このように装身具として長いあいだ使用されてきた勾玉であるが、奈良時代になると急速にその姿を消す。現在のところ東大寺三月堂に安置

されている不空羅索観音立像の宝冠を飾る勾玉が最も新しい使用例とされるが、この勾玉についても古墳時代以前の遺品であるとの説もある。いずれにせよ奈良時代以降においては勾玉が表舞台に登場することはなくなり、忘れ去られていく。もつともこれは勾玉だけではなく、装身具全般についても同様であり、古墳時代以降、いわゆる装身具によつて身を飾ることは、特に男性ではほとんど見られなくなる。最近、街中で散見する男性が耳飾りを付けている様子は、千数百年の時を経た現代に突然よみがえった姿である。

このように勾玉は古墳時代において最盛期を迎え、それ以降は急速に姿を消すものであると理解しているが、時空間を大きく隔てた近世沖繩に「琉球勾玉」と呼称される勾玉が存在していることを知った。そのきっかけは関西大学博物館が所蔵する、五点の勾玉を見たことである。通常、古墳時代の勾玉は首飾りを構成する一つとして、全長数センチを測るものが一般的である。ところがこの「琉球勾玉」は、全長が一〇センチ近くにもなり、一顆ですつしりと重いものである。とても数個を連結させて首飾りにするとは思えない代物である。石材も、古墳時代に使用

されているものとは異なった印象を受ける。しかしながら古墳時代勾玉と同様、頭部の孔から延びるように刻まれた二条の沈線を持つ、いわゆる「丁字頭」という形状を呈している。すなわち古墳時代遺物としての勾玉にはあり得ない大きさと石材であるにも拘わらず、まさしく古墳時代のそれであるという、極めて奇妙な品物である。正直、最初に一見した際は「なんじゃこりゃ」という感想を抱いたことを今も鮮明に覚えている。

この「琉球勾玉」は、琉球王国の神女を象徴する装身具として簪とともに身を飾ったものである(写真1)。現在でもノロを世襲していた家には勾玉と簪が残されているところがあり、さすがに現在は身に付けることはないようであるが、箱に入れた状態で安置し拝礼する習慣を残している。

筆者はかつてこの「琉球勾玉」を『博物館資料図録』に掲載した際、



写真1 「琉球勾玉」着装状況
(沖縄県立博物館・美術館常設展示)

古墳時代勾玉との関連をどう考えるのかという問題提起をおこなった^②。それ以降ずっと気にはなっていたが、近年同類の遺物をいくつか実見する機会を得たことから、長年抱いていた問題に対して、一つの仮説を提示したいと思う。

「琉球勾玉」をめぐる歴史を紐解いていくと、一八世紀における物産学の興隆、そして「琉球処分」という沖縄の歴史、さらには近代博物館における収蔵品収集過程、さらにその周辺にいた好古趣味を持つ人々の存在等々が複雑に絡み合っていることが明らかになってきた。「琉球勾玉」の全容を掴むにはまだその途上であるが、そのしつぽの一端に触れることができたように思う。

以下、現在までの調査結果を記述していきたい。

二. 関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」の概要

それでは、まず「琉球勾玉」がどのようなのかを、関西大学博物館所蔵品を紹介しながら見ていこう。先述したように五点の勾玉が存在しているが、1〜5までの番号を付してそれぞれの特徴を記していきたい(写真2・3)。

1は全長八・七八センチを測り、色調は暗緑色を呈する。頭部には二条の沈線がめぐらされており、いわゆる丁字頭を呈する(写真2-1)。さらには上の線とほぼ並行するように浅い沈線が認められるほか、数条の浅く短い線が認められる。これは高速で回転する工具で施文した際に、わずかに失敗したものと考えられる。そのように見ると頭部と腹部を区



2-2



2-1 細部



2-1

写真2 関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」その1

切る沈線を施した際に失敗したと思われる角度で刻まれた痕跡も認められる(写真2-1細部)。後述するが「琉球勾玉」については製作地が不明であるので、このような痕跡を丁寧に見察していくことが問題解決の糸口になる。頭部に穿たれた孔は、直径五ミリほどを測りほぼ真っ直ぐに貫通している。孔の中には土は付着しておらず、土中から採取されたものでないと判断できる。

2は全長七・二三センチを測り、五点の中では一番小さい(写真2-2)。色調は白色が斑に混じる暗緑色であり、極めて丁寧に研磨されており光沢を帯びる。頭部には二条の沈線が刻まれており、丁字頭となる。この沈線も丁寧に施文されており、孔も真っ直ぐに穿たれている。全形は腹部から尾にかけての湾曲が大きく、全体に丸みを感じさせる個体である。

3は全長九・七八センチを測り、白色が斑に混じる暗緑灰色を呈する(写真3-1)。本個体の特徴は、頭部と尾部の腹側、すなわち正面には平らな部分が残っており、全体が四角張っている。このことは長方形であろう原石から削りだしていく様子を窺うことができ、なるべく大きく削りだそうとした結果であるとも見られることも可能である。頭部には二条の沈線が刻まれているが、この頭部に穿たれた孔を起点として沈線が作る角度は小さい。この観点から見ると、後述する5と本個体の角度は狭く、1・2・4は広い。このように二本の沈線が作る角度によって工人の違いなどを反映するかどうかは、今後さらに検討の価値がある。もう一つの特徴は、本個体の孔はその中央がすぼまっていることから、すなわち断面が鼓状を示すことから、両面から穿孔されたものと判断できる。



3-3



3-2



3-1

写真3 関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」その2

4は途中で折損したものを接合しているが、全長は九・九三センチを測り、色調は白色が斑に混じる灰緑色である(写真3-2)。五点のうちでは最大である。本個体は、ややその作りが粗い印象を受ける。その理由として頭部に施された二条の沈線が波打つように歪んでいることと、頭部の穿孔を途中で一度失敗したらしく、やり直した結果不整な円形となっているためである。さらに3ほどではないが、頭部と尾部に平らな部分があり、原石から削りだした状況が窺える。

5は全長九・七五センチを測り、色調は他の四点とは異なり緑黒色から黒色を呈する(写真3-3)。また、表面には小さな気泡状の凹みが無数に認められ他との違いが際立っている。これらのことから、使用された石材が異なるものと判断できる。しかしながら形状に大きな違いはなく、頭部には二条の沈線を施し、尾部にかけてはやや湾曲が弱いものきれいに研磨されている。

以上五点の「琉球勾玉」を紹介してきたが、基本的な形状は一致するといつてよい。すなわち頭部には二条の沈線を施し丁字頭とし、頭部の穿孔は両面から施す。大きさについては小さいものが約七センチであり、最大でも一〇センチを超えないようである。石材については、少なくとも古墳時代の勾玉に使用されているような碧玉・硬玉・瑪瑙等とは異なっている。この石材についての岩石学的な検討は、関西大学工業技術研究室による調査結果が公表されている。^③その結果3については玉髓(Chalcedony)、あるいは緑玉髓(Chrysoprase)とされ、5については蛇紋岩(Serpentine)となっている。この鉱物名を聞いてもなかなか判断できないが、古墳時代の勾玉では見たことのない石材であることを記

述しておきたい。

最後にこの五点の来歴について記述しておく。今回紹介した中で、3は神田孝平の著した『日本大古石器考』（英書名：『Notes on Ancient Stone Implements, &c. of Japan』明治十七年刊行）に次のように、図面とともに紹介されている（図1^④）。

「曲玉ノ大ナル者ナリ。此類ヲ、琉球曲玉ト云フ。琉球ヨリ多ク來ルニ依テナリ。質ハ、玉（ネプライト）ナリ。」

（『Large sized Magatama: commonly called "Liu kiu Magatama" from its having been found there largely. Nephrite.』）

神田の記述は以上であるので、どのように手に入れたかについてはわからないが、明治一〇年代の段階で「琉球勾玉」の名称が使用されていることがわかる。また、この時期に沖縄からある程度の個体を持ち込まれていたことを暗示するような文章である。

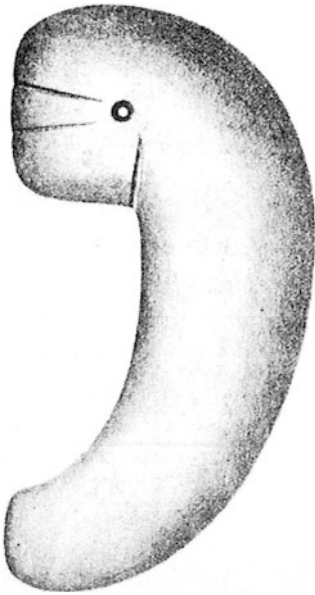


図1 『日本太古石器考』掲載
旧神田孝平所蔵「琉球勾玉」

以上、関西大学博物館が所蔵する「琉球勾玉」を観察してきた。これらの資料は神田が所持していたものであり、遅くとも彼の著書が刊行された明治一〇年代には手元にあったものと判断できる。しかしながらそれ以上の来歴は定かではなく、製作年代についても判断する根拠を欠く。しかしながら製作技法は五点とも同様であり、それほど時間を隔てて製作されたものとは思われない。さらには、詳細に観察しても土の付着は全く認められず、土中から採集したものではないと判断できる。

以上、「琉球勾玉」とはいかなるものかという点について理解を得られなかったと思うが、以下この勾玉をめぐる歴史的背景を述べていきたい。

三、「琉球勾玉」の研究史概要

本節では、この「琉球勾玉」について先学がどのように理解してきたか、そしてその存在意義をどのように考察してきたかを振り返っておきたい。沖縄における玉製品全体の研究史については、近年岸本竹美によって簡潔にまとめられているので、その論文に依拠しながら記述を進めていこう^⑤。

先述したように神田によって明治一〇年代には「琉球勾玉」が紹介されているが、明治二〇年代には南西諸島の民俗学的な報告の中に勾玉が登場し、田代安定によって報告されている^⑥。田代は薩摩藩の出身であり藩校を母体とする造士館で学んだ後、明治七年に上京し、田中芳男の元で植物学を学ぶ。田中は江戸時代の本草学の流れを引く植物学者であり、明治維新後は博物館及び博覧会の担当として政府に出仕する。その後、

第二代の博物館（現在の東京国立博物館）館長を務めるなど、専門の植物だけでなく、わが国の博物館創設期の主要な一人に数えられる。田代が専門の植物だけでなく、広く民俗学全体を視野に入れて、勾玉にも注目した報告を作成できた理由は、この田中の元で博物学全体の知識を身に付けていた結果であるともいえよう。その他明治年間にあつては、鳥居龍藏や中井伊與太が琉球諸島の勾玉と本土における出土品の類似点について比較検討をおこなった。⁷⁾

昭和に入ると、島田貞彦が「琉球勾玉考」と題した論考を発表した。⁸⁾これは前年に浜田青陵が沖縄各地を旅行し、今帰仁城で「阿応理屋恵勾玉」を見たことをきっかけに、島田に調査するように指示した結果である。⁹⁾浜田は旅行記の中で「いづれも朝鮮新羅の勾玉に酷似してゐると見るは、……（後略）」と記述し、「琉球勾玉」と古墳時代勾玉の関連性、さらには朝鮮半島との交流等に関心を示した。すなわち、古墳時代研究者として初めて「琉球勾玉」を解釈することを試みた。島田はこの指摘を受けて実地調査をおこない、勾玉を佩用する「ノロ」の民俗学的調査をはじめ、沖縄各地に所蔵されている勾玉の図を掲載した。さらには勾玉を小形のものと同様に分類し、先に紹介した関西大学博物館所蔵品と同類を大形品とした。

また、石材についても京都大学に持ち帰り、理学部の協力を得て分析し、日本国内では産出しないものと判断した。結論としては「琉球勾玉」は本土で出土する古墳時代勾玉とは出自が異なるものであり、「鎌倉期」前後に交易品としてもたらされたと位置付けた。この島田の考察は、考古学者らしく集成・分類・材質調査という他の考古遺物と同様の分析方

法を試みており、結論については検討の余地を残すものの、今日に続く基本文献といえよう。

そして昭和十九年には、下地馨が「宮古曲玉の研究」を発表した。¹⁰⁾下地は地元出身の研究者であり、丁寧宮古島に伝わる歌謡・伝説・文献を紹介する。特に、「一六九三年」の紀年名を残す『曲玉買入禁止の古文書』を示し、「琉球勾玉」が本土で製作され、売買によって宮古島にもたらされたとの考えを示した。すなわち島田の示した「鎌倉期」ではなく、琉球と本土の交流が盛んになる江戸中期という時期を提示した。江戸時代の交流については後述するが、下地の論文の中で、「琉球勾玉」の流出について、次のような文章があるので紹介しておく。

「四、五十年前、一時居留の旧藩の役人、公用旅行者達が、当時宮古人が曲玉に無関心なるを幸いに（宮古には昔より多数ある故、別に珍らしとも考へず、失ふを惜しいとも思わなかつたらしい）しこたま手に入れて北叟笑むで持ち帰つた事もあつたし……（後略）」

下地がこの文章を書いたのが昭和十九年直前とすれば、四、五十年前とは明治三〇年代のことになるうが、明治一〇年代には神田の手元に存在したことを考えると、それ以前より同様の状況によって流出していたことが予測できる。この「琉球勾玉」が流出していく過程については次節で触れることとしたい。

さて、下地の研究を最後に、第二次世界大戦から米国による統治時代の終わりを告げるまでの間は、勾玉研究も一時停滞を余儀なくされる。その一方で本土復帰後には、発掘調査によって勾玉が出土するようになったことから、考古遺物としての考察が増えてくる。また、南西諸島を

くまなく歩き、古墳文化の痕跡を探し求めた白木原和美によって各島の勾玉が紹介された¹¹⁾。結論的には南西諸島に古墳文化は波及していないとしたが、須恵器の存在と併せて考察を進めていく必要性を論じている。

近年の研究では、冒頭に示した岸本の研究と、同じく岸本義彦らによって南海地域の玉文化全般へと研究が進んでいる¹²⁾。これらの研究による発掘調査の結果から、沖繩における勾玉の出現はグスク時代（一二～一五世紀）であることを指摘する。この年代観は、谷川章雄によって追認されており、沖繩本島恩納村熱田貝塚ハ地区第Ⅲ層から、中国南宋の白磁等とともに出土した石製勾玉に、一二世紀という年代観が与えられている¹³⁾。さらに谷川は、「遺跡出土の勾玉では、丁字頭を持つ勾玉はほとんどない。」との指摘をしている。すなわち先に紹介した大形の丁字頭勾玉は、遺跡からは発掘されておらず、資料の観察結果からも土が付着した資料はないことと整合する。この点については後述するが、沖繩県内から出土する「琉球勾玉」であつても、その形から「勾玉」という一括りにしがちであるが、大きさ・材質・形状によって一系統ではないことも視野に入れつつ考えていく必要がある。

また、近年の発掘資料で特筆すべきこととしては、斎場御嶽の「三庫裏」の基壇下から金製の勾玉が出土し（写真4）、共伴した「新寛永通宝（初鑄は一六九七年）」から埋納時期は一七～一八世紀と想定されていることである¹⁴⁾。ここからは九個の勾玉が出土し（うち一点は丁字頭勾玉・全長六センチ）、この九という数字が琉球神道において神聖な数字であることから、これらの勾玉は「鎮め物」という解釈がなされている¹⁵⁾。

このように発掘品による勾玉資料が増加し、その所属年代が明らかに



写真4 斎場御嶽「三庫裏」

なつてくるとともに、再びノロの勾玉にも注目が集まるようになる。例えば仲原弘哲によって、「ノロ祭祀具の中の玉製品」という論考が発表され、伝世品の資料化が図られた¹⁶⁾。同様に宮城弘樹によって、「今帰仁阿庇理屋恵勾玉」の実測図が公表されている。宮城は沖繩県内の発掘資料から、グスク時代の一四世紀前後に勾玉が装身具として定着した可能性を指摘し、その一方で本土の弥生・古墳時代からの影響を肯定する材料はないと述べる¹⁷⁾。

以上、「琉球勾玉」の研究史を概観してきたが、明治年間から勾玉は注目され、研究対象となってきた。当初は民俗学的な考察が多く、『おもろそうし』にある本土へ玉を買いに行く記事を引用しながら、外部から持ち込まれたものであるとする論が多い。その後、石材の検討から中国大陸、あるいはさらに遠方からの交易を指摘するなど、「琉球勾玉」のルーツを探す研究が続けられている。そして近年の考古学的な発掘調査結果

から、沖縄における勾玉出現がグスク時代であることが定着しつつある。しかしながら重要な点は、今回紹介した関西大学所蔵資料のような大形で丁字頭を呈する勾玉は、発掘資料には皆無であって、そのすべてが伝世品であるということを再確認しておきたい。

以下、この研究史を踏まえつつ、再度「琉球勾玉」そのものの観察へ論を進めていこう。

四．本土に持ち込まれた「琉球勾玉」について

本節では、本土にある「琉球勾玉」の諸例を紹介しながら、その流出経緯を明らかにしていきたい。管見では関西大学所蔵品と同様の勾玉は、東京国立博物館・静嘉堂文庫・東京大学総合博物館の三施設が所蔵している。そのうちまずは最も多く琉球資料を所蔵し、その目録も刊行されている東京国立博物館の資料から見ていくこととしよう。

東京国立博物館所蔵の琉球民俗資料は、勾玉単体ではなく「玉ハ（ホベル）」や「玉ガーラ（玉珈玻璃）」と呼ばれる多数の水晶玉と勾玉、さらには房紐が連結された装身具となっているものがある。この形状によって、各地のノロに国王から下賜されたものであると伝えられる¹⁵⁾。写真に示したものがその一つだが（写真5）、黒水晶玉五五個と一個の勾玉が連結されており、全長は五〇センチを測る。このうち勾玉は全長八センチを測り、頭部には二条の沈線が施され、丁字頭となっている。色調は白色が斑に混じる暗緑色であり、関西大学博物館所蔵資料2の石材に類似する。公刊されている図録によれば、この玉ホベルは奄美大島から将来



写真5 東京国立博物館所蔵「玉ハベル」
(TNM Image Archives)

したものであり、明治五年に「売上人不明」ではあるが、購入資料とされる¹⁶⁾。本資料を含め登録番号が続く五点が同様に明治五年に奄美大島からもたらされた資料であり、そのうち一点を「江夏干城」から購入したと記録されている。五点のうち一点だけを江夏から買い上げて、他四点が不明という理由はわからないが、連番であることから考えて、五点とも江夏もしくはその近辺に存在した人物から購入したと推測しても問題はなかろう¹⁷⁾。すなわち、今回紹介している東京国立博物館が所蔵する「玉ハベル」は、開館したばかりの博物館（開館日は明治五年三月十日）によって購入された資料であり、かなり早い段階で博物館の所蔵資料となっていることがわかる。

そしてこの明治五年という年は、「琉球処分」と呼ばれる明治政府によって琉球王国が解体され、明治十二年に沖縄県が設置されるまでの一連

の政治変動が始まった年である。明治五年九月十四日には、その第一段階として琉球王国が解体され、国王尚泰は琉球藩王に封じられ華族として明治政府に組み込まれた。²⁴⁾ その後の数年間は、琉球の政治・文化が大きく揺れ動く期間であるといえる。すなわち、国王を頂点とした政治体制の崩壊とともに、国王から任じられたノロによって執り行われる祭祀形態にも緩みが生じたことが想定できる。そしてその結果、ノロの所持品であった玉ハ（ホ）ベルや、さらにはそのうち最も目を引いたと考えられる大形の勾玉が琉球各地から持ち出されたことが想定できる。このような経緯を考えると、明治一〇年代に神田の手に「琉球勾玉」がもたらされた時間経過がよく理解でき、さらに神田が琉球から、この種の勾玉が多く将来したと記述した内容も首肯できる。もちろんこの神田の入手方法や、江夏から博物館が買い上げたことが不正な手段であったとはいえないが、琉球の混乱に乗じて多くの文物が流出したことは事実である。

続いて「江夏干城」について、彼が「琉球勾玉」に係わった経緯を見ていきたい。彼の生没年は不明であるが、薩摩の出身であって『日隅薩巡回採摘品彙編圖（にちぐうさつじゅんかいさいてきひんいそず）』という日向・大隅・薩摩を巡回しながらその土地の物産調査をおこなった記録を残した主要な人物として知られている。²⁵⁾ この調査はいわゆる物産調査であるので植物・生物が主であるが、各地の古器物（鏡・勾玉など古墳出土品）についても記録を残している。この調査は明治五年四月から五月にかけて実施したものであるが、江夏は翌明治六年には中央政府の博覧会事務局の名簿に「十三等出仕」として記録されている。さらには

この物産調査においても一人の主役であった木脇啓四郎も明治四年に博覧会事務局に出仕している。²⁶⁾ このような人事は博物館（現在の東京国立博物館）の初代館長町田久成が同じく薩摩藩の出身であるので、彼によって二人は中央政府に呼び寄せられたと考えられる。

さらには薩摩出身であって、中央政府の博覧会事務局に出仕していたとなれば、前節で紹介した田代安定との関連も見えてくる。また、薩摩藩は江戸時代から琉球と深い関係にあり、琉球処分にあたっては先頭に立って大きな役割を果たしている。よって琉球の文物に江夏・あるいは田代が精通していることは当然なことであり、博物館が江夏から琉球の文物を買い上げることも納得がいく。この購入にあたっては、現在のよう博物館における学術資料としての認識よりも、まさに南の島々からもたらされる珍しい品々として、新生日本の領土に組み込まれた地域に産出するものとしての興味が大きいと思われる。このような状況が、まさに博物館揺籃期の資料収集過程の一端であろう。

話がそれだが、再度江夏干城に立ち返り、彼の周辺から持ち込まれたと考えられる「琉球勾玉」を見ていこう。その「琉球勾玉」は、静嘉堂文庫において公開された、松浦武四郎の收藏品にある。²⁷⁾ 今回公開された資料の中からは、江夏が関与した松浦への売買文書を紹介しよう。

「売渡之証」

一 青琅玕曲玉 一ツ

一 青玉曲玉 壹ツ

一 大曲玉 壹ツ

一古劔鰐ッ并古劔石二ッ

右之品々拙者所有物ニ而今般貴殿江

代金六拾円ニ売渡候義実正也

然ル上ハ右品物一条ニ付以後外々より

何等申者有之候共貴殿江聊

御迷惑相懸不申候間為後日

讓状尅札依而如件

第二大区小七区麻布永坂町三十八番地

島津忠寛邸内

明治九年九月十六日

鈴木恭信

江夏千城代印 印

松浦武四郎 殿

この文書の内容について多くを説明する必要はないが、松浦が鈴木恭信なる人物より勾玉をはじめとする古器物を購入し、その売買に江夏が代理を務めていることがわかる。さらに「島津忠寛」は日向国佐土原藩の最後の藩主であり、「鈴木恭信」がどのような人物であるか不明であるものの、旧藩主宅で売買をおこなっている以上、日向との関係が深い人物であることは確かであろう。それゆえ先の物産調査に参加した江夏が、関与しているものと考えられる。そしてこの文書で興味深いことはその日付であり、明治九年九月という、まさに琉球処分のもっただ中に

あることに注目したい。

さて静嘉堂文庫に収められている武四郎の収集品は、これらの文書と共に実物資料がそのままの形で保存されていることに大きな価値がある。よってこの「売渡之書」にある「大曲玉」が具体的にどれを指すのかについては、おおよそ見当がつく。静嘉堂文庫所蔵品のうち、全長七センチ以上で、且つ二条の沈線によって丁字頭となっている「琉球勾玉」は、四点存在する。そして松浦の著作である『撥雲餘興』にも、「琉球勾玉」と判断されるものが掲載されているので紹介しておく。

写真6に示したものが静嘉堂文庫にある、「琉球勾玉」の一つである。この勾玉は、その大きさから『撥雲餘興』に掲載されているものと同じ個体であると判断できる(図2)。図の横にはには、全長が二寸七分五厘(八・三センチ)と記述されており、色調が「青黒白斑點」とあることから、関西大学博物館所蔵資料と同様の石材であることがわかる。但し、



写真6 静嘉堂文庫所蔵
旧松浦武四郎所蔵「琉球勾玉」
(註24より転載)

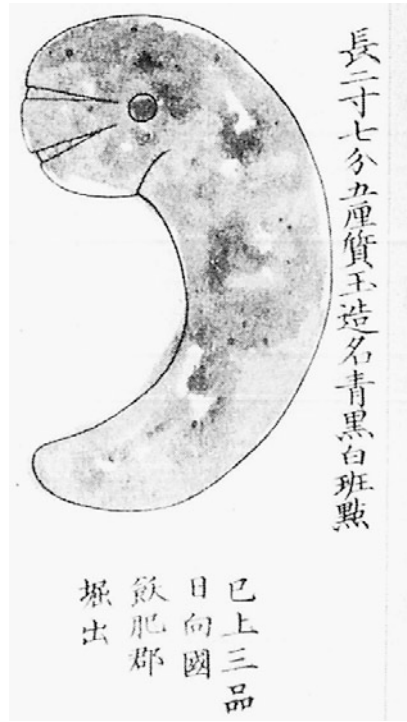


図2 『撥雲余興』掲載
旧松浦武四郎所蔵「琉球勾玉」

『撥雲餘興』には、これらの出土地が「日向国飢肥郡掘出」と記述されている。しかしながらこのような大きさ、材質の勾玉が琉球以外に存在しているとは考えられず、ましてや土中から出土するものではないことから、この記述自体が誤りであると考えている。むしろ江夏が日向の物産調査に従事していることや、売買が日向国の旧藩主宅でおこなわれたことから、松浦自身が「飢肥出土」と誤解した可能性があると考えている。よって、松浦自身は「琉球勾玉」とは認識しておらず、石材は中国東北部黑竜江省付近に産するものと考え、自身が踏査した蝦夷地方を經由してもたらされたと考えしている。

なお、松浦と江夏の関係であるが、晩年松浦は「一畳敷」という草庵を建設しており、その部材の一つとして江夏から「大隈大河平竹」が寄贈されていることが知られている。

以上、東京国立博物館と静嘉堂文庫に所蔵されている「琉球勾玉」について、特にその来歴を中心に記述してきた。どちらにも江夏干城が関与しており、彼が薩摩出身であって、さらには物産調査に従事した人物であることから、「琉球勾玉」が本土に持ち込まれる過程の一端を明らかにし得たと考えている。そしてその時期は、まさに琉球処分による大きな政治変動のために、琉球が慌ただしくなっていた時期であろうと考えられる。もちろん、不正に搾取したというわけではないが、下地馨が指摘したような状況があったことが想像できる。

なお、東京大学総合博物館所蔵資料についてはその来歴調査をおこなっていないが、田代安定は農商務省を退官したあと、東京帝国大学の嘱託として南西諸島を探查しており、その頃にもたらされた可能性も考えられる。

以上本節では「琉球勾玉」が本土に持ち込まれた状況を、東京国立博物館と静嘉堂文庫が所蔵する旧松浦武四郎蒐集品を紹介しながら見てきた。いずれも明治一〇年代頃、すなわち琉球処分という激動の時代に琉球から流出した可能性が高いことを指摘した。そしてそこには明治初めの博覧会事務局などに勤務し、物産調査を進めていた役人の関与も認められる。もちろん何度も記すがすべてが不正な手段で持ち出されたというわけではなく、明治政府にとって琉球は新天地であって、その文物への興味が高かったことも一因であると考えられよう。いずれにせよ百数十年前のことを云々するよりも、今残されている資料をきちんと評価することが重要であると考える。

五. 沖繩に残された「琉球勾玉」の存在

これまで「琉球勾玉」について、関西大学博物館が所蔵するもの、そして東京国立博物館等が所蔵するものを見てきた。これらの勾玉は「琉球処分」の頃、本土に持ち込まれたものであろうことを論述してきた。本節では現在も沖繩に残されている「琉球勾玉」を観察して、改めてその特徴を看取していくこととしたい。

まずは、沖縄県立博物館・美術館（以下、沖縄博とする。）が所蔵する勾玉から見っていくこととしよう。沖縄博には多数の勾玉が所蔵されており、その材質も石・ガラス・陶器などさまざまである。また、出土地が必ずしも沖縄県内に限らない可能性もあり、そのすべてを取り上げることには不可能である。よって今回観察対象としたものは、これまでに見てきたような大形で丁字頭のものとし、この条件に該当した資料は四点であった。写真7・8に示したとおりであるが、順に紹介していこう。

1（沖縄博所蔵番号Z01631）は、全長六・八一センチを測り、これまで紹介してきた「琉球勾玉」の中では最小である（写真7-1）。色調は灰色に黒色が斑に混じるものであり、この色調を呈する石材もこれまで紹介した中にはないものである。しかしながら製作方法は他の勾玉と共通し、極めて丁寧に研磨されており光沢を帯びる。頭部には二条の沈線が刻まれており、丁字頭となる。頸部と胴部を区切る沈線も施されているが、関大博所蔵勾玉1と同様に一度失敗した痕跡を残しており、施文方法が同一であることを示している（写真7-1-1細部）。頭部に穿たれた孔は両面穿孔であり、中央部が狭くなっている。



7-2



7-1 細部



7-1

写真7 沖縄県立博物館・美術館所蔵「琉球勾玉」その1

2 (沖縄博所蔵番号NO.10712) は、全長七・二七センチを測る「琉球勾玉」である(写真7-2)。色調は淡緑灰色を呈し、斑文は混じらない。緑色を呈するものの碧玉、あるいは緑色凝灰岩ではないことは明らかであり、軟玉系の石材であって古墳時代の勾玉には用いられない石材である。頭部には二条の沈線が刻まれており丁字頭となることは他の勾玉と同様であるが、やや浅い沈線となっている。頭部に穿たれた孔は両面穿孔であり、直径をほとんど変えずに真っ直ぐに貫通している。

3 (沖縄博所蔵番号NO.10690) は、全長八・〇六センチを測り、典型的な「琉球勾玉」である(写真8-1)。特に本資料には、伝「聞得大君」所有という伝承を伴っていることが重要である。いうまでもなく「聞得大君」は琉球王国における最高の神女であり、伝承とはいえこの大きさの勾玉が彼女の手元にあったということは、「琉球勾玉」全体の意義を考える上で重要である。色調は暗灰色に白い斑文が混じるものであり、石材の質感は関西大学博物館の所蔵品と全く同様である。頭部・尾部とも丸く丁寧に研磨されており、二本の沈線によって丁字頭となっている。

4 (沖縄博所蔵番号NO.437) は、現在二点に割れている。接合して計測すると、全長八・〇〇センチを測る(写真8-2)。本資料は、研究史でも取り上げたように白木原が論文に掲載したものであり、昭和二十七年に沖縄博の所蔵となっている。頭部に二条の沈線を施し丁字頭とする点や、頭部・尾部を丸く研磨するところは他の勾玉と同様である。色調は暗緑色を呈し、白色が斑に混じる。本個体は割れているので、石材の断面を観察できるが、石英の粒が混じっていることが確認できる。また、頭部の穿孔が両面からなされている状況もよく観察でき、孔の中には土



8-3



8-2



8-1

写真8 沖縄県立博物館・美術館所蔵「琉球勾玉」その2

の付着はなく、土中からの将来品でないことが改めて確認できる。

さて以上四点が沖繩博が所蔵する、関西大学博物館が所蔵する「琉球勾玉」と大きさや形状が類似する資料である。しかしながら沖繩博には多数の勾玉が所蔵されており、そのうち大きさ以外は今まで紹介したものと同様の勾玉を一点紹介しておく。5は(沖繩博所蔵番号NO.10692)は、全長四・九七センチを測る(写真8-13)。すなわち大きさは五センチに満たないものの、石材や形状は1〜4に紹介したものと同様である。色調は淡黒色を呈し、白い斑文が認められる。頭部の沈線や穿孔方法についても大形の勾玉と同様であり、「琉球勾玉」には本個体と同様に五センチ前後を測るものも存在することを確認しておく必要がある。

さらには沖繩博が所蔵する他の勾玉を実見すると、全長三センチ程度のものにも頭部に沈線を施し丁字頭に仕上げたものも存在する。このように見ると「琉球勾玉」と一括りにすることは十分ではなく、小稿で扱う「琉球勾玉」の定義については後述することとしたい。

続いて、もう一点現在も沖繩県に残されている「琉球勾玉」を紹介したい。この資料についても研究史で取り上げたように、宮城弘樹が紹介した「今帰仁阿庇理屋恵」が所有していた勾玉である。現在は所有者から今帰仁村歴史文化センターに寄託され、展示されている。

現状では大形勾玉一点、その他勾玉二点、水晶製丸玉三〇点が連結され、全長八〇センチほどの長さとなっている。この一連を所持した今帰仁阿庇理屋恵(なきじんあおりやえ)とは、先に記した琉球王国最高神女「聞得大君」に次ぐ地位を持つ高級神女(三十三君)の一人であり、各村々に存在したノロとは別格である。現在では公式にはこの神女組織

は存在していないとされるが民間信仰としては息づいており、国頭地方の最高神女として命脈を保っている。この一連の勾玉がいつから阿庇理屋恵の元で受け継がれてきたかについては明らかではない。文献史料によれば一六世紀から一八世紀初めまでに五代の阿庇理屋恵が記され、その後一七三一年には一度廃止されるが、一七六九年に再度王府から公認されて復活し、その後は今日まで途切れることなく引き継がれてきた。確定できるものではないが、再度王府から公認された「一七六九年」という数字を起点としておきたい。

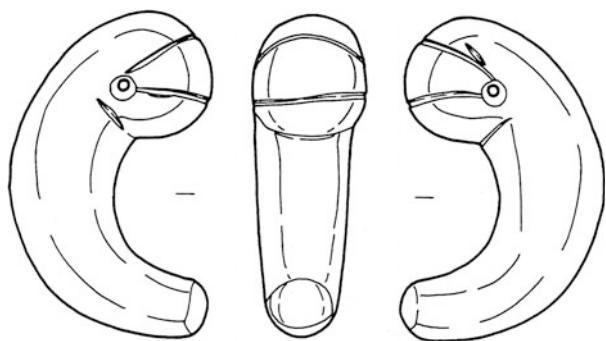


図3 「今帰仁阿庇理屋恵 琉球勾玉」(縮尺=1/2)
(註⑦より転載)

さて、大形勾玉については宮城の示した図面(図3)に基づいて見ていきたいが、全長は八・八センチを測る。頭部には二条の沈線を施し、丁字頭とすること、頸部に沈線を入れ頭部と胴部を区切ることに、頭部の穿孔は両面からおこなう点などは、ガラスケース越しの観察であるがこれまで見てきた「琉球勾玉」の諸特徴と一致する。問題は石材であり、宮城の報告では北海道十勝産の黒曜石であると紹介されている。この鑑定の根

扱は不明であり、また十勝産の黒曜石について詳しいわけでもないが、見たところガラス質には見えなかった。黒曜石のようなガラス質の石材を研磨し勾玉のような曲面を作り出せるのか、頭部の細い沈線を施せるのかについては知見を持ち合わせないが、石材を北海道産とすることに疑問を提示しておきたい。このような石材はこの阿応理屋恵の一連には認められないが、先に紹介した沖繩博所蔵勾玉の5に類似しているように見える。この石材の問題は、今後のさらなる同定作業を俟つこととしておきたい。

その他この阿応理屋恵勾玉に連ねられた二一個の勾玉は、全長四〜五センチに収まるものである。そしてその材質も一定しておらず、蛇紋岩・玉髓・緑色片岩等との鑑定結果が報告されている。さらに形状としては頭部に凹みがあり、さらには胴部にも穿孔されている勾玉一点、いわゆる縄文時代から弥生時代に盛行する「獣形勾玉」一点が含まれている。その他九点についても丁字頭勾玉となるものと、そうでないものが混在する。これもガラスケース越しに見た感想であるが、すべての勾玉が同時期に製作され一連とされたのではなく、寄せ集めて現在の形になっているように感じられる。

以上、沖繩県内に現在残されている「琉球勾玉」について、沖繩博が所蔵するものと今帰仁阿応理屋恵の勾玉を紹介した。その結果、改めて関西大学博物館が所蔵するものと諸特徴が一致することが明らかとなった。そして前節で紹介した東京国立博物館・静嘉堂文庫所蔵品も間違いなくこの特徴を有している。よって本土の各機関に所蔵されるものが「琉球勾玉」であることは疑いがないと判断するが、改めて小稿で考察して

いく勾玉の特徴を明らかにしておきたい。

琉球（各島を含む）において出土する勾玉は、沖繩博に所蔵されているものだけを見ても大量に存在していることは間違いないが、大きさでいえば、全長七センチを超える大形のもの、五センチ程度の中形のもの、三センチ程度を測る小形のものに分類できる。このように大きさで区分することは島田貞彦が大小の二種類に区別し、さらに白木原和美が大中小の三種類に分類すべきであることを指摘している。

さて、小稿ではこれまでも「琉球勾玉」について、関西大学博物館が所蔵する大きさのものを対象として考察を進めてきたが、琉球で出土する勾玉を一括で扱うのではなく、小稿では大きさを三分した内の大形の勾玉に焦点を当てて、その出現の経緯を見ていくこととしたい。その特徴を列記していくと、大形の勾玉が遺跡から出土することは今のところはなく、すべて伝世品である。これは沖繩博所蔵のものを含め、これまで詳細に頭部に穿たれた小孔の内部などを観察したが、土が付着したものは一点も存在していないことと合致する。もう一つ特徴としては、この大形の勾玉はいずれも頭部に二本の沈線を施し丁字頭としている。中形・小形のものには丁字頭と、そうでないものの両方が存在するが、大形勾玉にかぎっては、これまで管見で見たものすべてが二条の沈線を持つ丁字頭勾玉である。

そしてその大きさについて、全長何センチ以上を大形にするかという点に関しては、とりあえず七センチ程度以上としておきたい。この数字の根拠はこれまでに観察した資料のうち、伝世品であって頭部に二条の沈線を有する最小のものは、沖繩博が所蔵する全長六・八一センチであ

ることと、古墳時代資料であつて七センチを超えるような勾玉は出土していないことによる。管見では古墳から出土する勾玉であつて、大形といえるものは、例えば大阪府堺市塚廻古墳出土の硬玉製の勾玉が六・一七センチ、同じく大阪府和泉市和泉黄金塚古墳中央塚第三群出土碧玉勾玉が六・八センチを測り、古墳時代に属する勾玉すべてを観察したわけではないが六センチ台がほぼ最大の数値であろうと思われる。⁷⁷⁾ すなわち「琉球勾玉」は、古墳時代の勾玉とは性格や存在意義が異なるものと考えることから、七センチというところで線引きしておくものである。

このように大形勾玉に焦点を絞ることで、同じ勾玉の形をしていても製作時期やその存在意義に特化して考えることができる。以下、本節で記述した大形の「琉球勾玉」について、その製作の経緯を考えていくこととしたい。

六. 「琉球勾玉」製作の経緯について

これまで述べてきたように「琉球勾玉」を、その大きさが全長七センチ程度以上を測り、頭部に二条の沈線を施すことによつて丁字頭を呈するものと定義して、本節ではその製作の経緯を考えていきたい。

さて、先の研究史では明治年間から「琉球勾玉」が本土に紹介され、『東京人類学雑誌』等に報告されてきた事実を記述した。しかしながらこの「琉球勾玉」については、それ以前の江戸時代から本土に知られていたことを明らかにしていきたい。

江戸時代の勾玉研究は、物産学の一派として位置付けられる弄石家に

よるものと、国学の観点から取り上げたものがある。前者の代表が木内石亭による『曲玉問答』（二七八三（天明三）年刊）であり、後者は谷川士清による『勾玉考』（一七七四（安永三）年刊）である。前者の木内石亭については、これまでもたびたび取り上げてきたが、一八世紀の中頃から勃興した物産学の中でも「石」に特化して蒐集・分類を試み、多くの書物を著した。関西大学博物館所蔵品においては、木村兼華堂が所蔵していた鍬形石の著述を紹介した。⁷⁸⁾

この石亭の著作の一つが『曲玉問答』であり、内容は勾玉についてさまざまな質問に答える形で、彼の勾玉に対する研究成果を述べている。よつてまずはこの書物に記述された「琉球勾玉」に関する部分を抜粋してみたい。

問「或人云、琉球ニテ神ヲ祭ル婦人、神拝ノ時首ニ掛物アリ。種々ノ

美玉ヲ連タル物アリ。其両端ニ曲玉アリ吾視リ是ヲ見タリ。茲ヲ

以テ見ル時ハ琉球ノ製作ニテ偶日本へ渡タルモノ歟」

答「答云、琉球ニテ是ヲノロクメト云琉球ノ詞ナリ、又蝦夷ニテ大将

分ノモノ建玉ヲ頭ニ掛テ飾トシ礼式トス。是ヲシトキト云蝦夷ノ

詞ナリ、其両端ニモ曲玉アリ。予按ニ上古ハ和漢一統ニ玉ヲ以テ

身ヲ飾ル。時移リ代変リテ我朝其式絶タリ。琉球蝦夷ノ邊鄙ニハ

古實トモ残レリト見ユ……（後略）」

この問答の内容から、一八世紀当時の「琉球勾玉」の認識を知ることができるが、琉球の言葉で「ノロクメ」と呼ばれる女性司祭が首に掛ける使用するものという正しい理解が石亭の元に伝えられていることがわかる。石亭は蝦夷地方の「勾玉」と併せて解釈を試みているが、両者の

所属時期に対する認識が不足しているために、今日的には誤った解釈といわざるを得ない。しかし彼が北海道から沖繩に至るまでの、各地の勾玉に精通していたことには改めて驚かされる。

そしてまたこのような記述ができることは、石亭の元にはかなり豊富な琉球の情報が届いていたことの証拠であろう。具体的にいうと石亭コレクションの中には、琉球に産出する「石」も存在したようである。それは秋里籬島の編纂した『東海道名所図会』（一七九七（寛政九）年刊行）に、「山田石亭」が紹介されているが、そこには「琉球珊瑚」「琉球石柏葉」が描かれていることから判明する。さらに情報という意味では、石亭の師匠にあたる田村元雄（藍水）は、一七七〇（明和七）年に、『琉球物産誌』を著している。このような状況を見れば、石亭の元に正確な「琉球勾玉」の情報が届いていたとしても何ら不思議なことではなく、むしろ当然であるかもしれない。

この一八世紀の後半には物産学の興隆により、各地の物産品が、特に薬草となる植物などが各地から江戸に集められ「物産会」・「薬品会」が開催されている。その中心になって活躍した一人が平賀源内であり、源内と石亭の交流もこの薬品会を通じて確認されている。源内が琉球へと旅立ち、大活躍するお話は小説の中のことであるが、この当時琉球への興味が大いに高まっていたことは史実であろう。

そして彼らの情報源は「江戸上り」と呼ばれた、琉球王国から江戸幕府へ派遣された朝貢使節団が大きな役割を果たしたと考える。この使節団は一六〇九年の薩摩侵攻をきっかけに、一六三四年から幕末までの間に一八回にわたって派遣され、琉球国王の即位に伴う謝恩使と、徳川将

軍の代替わりに伴う慶賀使の二つからなる。石亭らが活躍した時期の「江戸上り」としては、一七六四（明和元）年の徳川第一〇代家治、一七九〇（寛政二）年第一一代家斉への慶賀使と、一七九六（寛政八）年の第二尚氏王朝第一五代国王尚温就任における謝恩使の三回である。この使節団は琉球から薩摩へ至り、瀬戸内海を航海し大坂に上陸する。そこから京都を経て江戸に向うが、その際には石亭の居住していた大津を通過したことも知られている。この使節団が異国としての「琉球」の存在をアピールする場であったことは間違いなく、使節団がもたらす情報に、石亭ら物産家が興味津々であったことは容易に想像がつく。この使節団には単に政治外交をおこなう使節だけではなく、琉球音楽や琉球舞踊を担当する団員も含まれており、文化交流としての意味合いが大きかったことが知られている。

さて、結論を先に記せば、この「江戸上り」による文化交流が、「琉球勾玉」誕生の契機になったという仮説を提示してみたい。先述したように「江戸上り」は琉球と本土の文化交流であったことは疑いなく、石亭らが琉球の文物に興味を持ったように、琉球使節団もこの当時に盛んに論じられた「勾玉」に注目したとしても不思議ではない。それは先に挙げた谷川の『勾玉考』には、三種の神器の一つである「八尺瓊勾玉」について『古事記』・『日本書紀』の記述からその形状や存在意義がさまざまに語られている。琉球使節団にとって三種の神器を承知していたか否かはともかく、琉球の神女が身に付けている勾玉が本土の神代において重要な神器であったことに驚きを禁じ得なかったであろう。

さらには、石亭が「琉球勾玉」の原形を思わせるような巨大な勾玉を所

有していた可能性も指摘できる。それは谷川が彼の著作（『勾玉考』）において、「江州山田浦石亭之所藏則有其大如小児腕」と記述する。すなわち「子供の腕」ほどある勾玉とはいかなるものかだが、『曲玉問答』の巻末には「勢州谷川先生著述勾玉考ニ江州石亭ノ藏スル物ハ小児ノ腕ノ如ト書レタルハ是ナリ」と記した図が掲載されている（写真9）。このような大きさの勾玉は古墳時代には存在していないことは確実であり、石亭が所蔵した勾玉が本物であるか否か、またどこから入手したものかを確認できないが、「琉球勾玉」を想定させる大きさであることは疑いない。

さらにこの絵図の横には「是ヨリ大ナルハナシ。贗物ニハ大ナルモノアリ」と記されている。この絵図の大きさは、あくまでも絵図であるが、

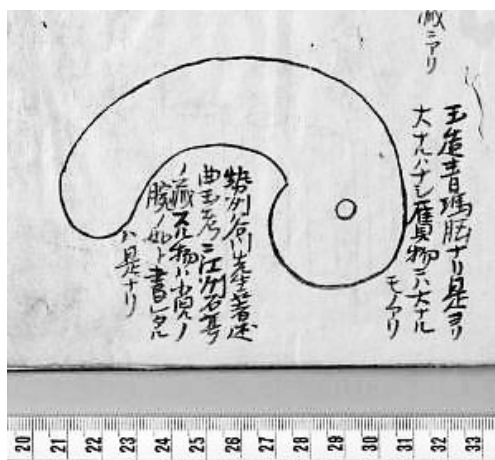


写真9 『曲玉問答』掲載「大形勾玉」
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

全長一〇センチ程度に描かれている。そしてこの図よりも大きいものは「贗物」であると記しているところが重要であって、前節まで見たように「琉球勾玉」にあつては全長一〇センチを超えるものが存在していないこととの理由はこの記述に求められるのではなからうか。さらには『曲玉問答』に掲載された絵図には「丁字頭」の勾玉が描かれており、大きさと丁字頭を組み合わせて「琉球勾玉」を作り出すことは可能であると考えられる。

これまでも記しているが、「琉球勾玉」の製作場所は明らかになつていない。それゆえ想定は積み重ねになるが、本土において『曲玉問答』を見た使節団はこの書物の図にある勾玉を見て、この図よりも大きくな勾玉の製作を試みたと考えたい。そもそも使節団がもたらした情報は、神女を象徴する器物についての事項であるから、王国内で厳重に扱われたであろう。小稿で紹介してきた大形勾玉は国王から神女に下賜されるものであり、権威あるものとして取り扱われたものである。それゆえ誰もが勝手に内地からもたらされた情報によって製作することは許されないと考えて差し支えない。石材は琉球では採集されないものであるから、おそらく中国大陸からもたらされたとして、製作そのものは官営工房のようなどころで、王国の管理下で製作されたと考ええる。

さらに琉球以外で「琉球勾玉」が出土しないことは、一八世紀の後半における本土では、勾玉を研究対象とするものの実用に供するものではなく、研究はするが実物を必要とする社会でなかったことは確かである。この時期に勾玉を必要とした社会は琉球王国だけであつて、それ以外の土地では使用しないのであるから、「琉球勾玉」の製作は琉球王国の管理

下にあると考えざるを得ない。すなわち琉球以外で出土しない理由は、この点に求められよう。

時代も製品も異なるが、古墳時代研究者にとってなじみのある「三角縁神獣鏡」を例に挙げることが、この「琉球勾玉」の製作についても考えられる。特に「倣製三角縁神獣鏡」は、日本国内で製作されたとされるが、いまだにその製作場所は明らかになっていない。しかしながらこの鏡は中国製の三角縁神獣鏡を国内で模倣して、その権威も舶載三角縁神獣鏡を継承した器物として製作されたとする。すなわちヤマト王権内で管理されて製作されたからこそ、その価値を伴って各地に下賜されたと考えられている。

話がそれだが、小稿における結論として「琉球勾玉」は、一八世紀後半に本土に「江戸上り」で来訪した使節団が『曲玉問答』等の研究に接し、そこに描かれた勾玉の図を見たことよって、王国内で製作されたものであるという仮説を提示したい。その根拠としてグスク時代に所属すると考えられる勾玉は、今回紹介したような定型化したものではなく、勾玉の形としては整っていない。今回紹介しているような定型化した形は古墳時代の勾玉の形を模倣せずには製作できないものであり、古墳時代以降において、この形を模倣できる機会は一八世紀後半における石亭らの勾玉研究にのみ求められるのではなからうか。

このように考えると「琉球勾玉」の製作は、『曲玉問答』等が刊行される一八世紀中頃以降であって、このことは土中から出土しないことと整合する。さらには明治になって多数流出したことも、それほど古い製作ではないことから数が残っていたであろうと想定できる。また先に記し

た「今帰仁阿庇理屋恵」が、一七六九年に王府から再任された時期とも一致することが指摘できる。

以上、「琉球勾玉」の製作の経緯について仮説を提示してみた。実証するためには「江戸上り」の実態をさらに精査することなど課題は多いが、「琉球勾玉」が古墳時代から時空間を大いに隔てた琉球に出現した理由を無理なく説明できると考える。

七. まとめ

関西大学博物館が所蔵する「琉球勾玉」を見たことをきっかけに、その存在意義を考察してきた。「琉球勾玉」は、形が古墳時代の勾玉と一致するものの、大きさと石材は異なるといふ実に奇妙な資料である。そして琉球においては、他の文物、例えば武器・武具、あるいは土器等も含め古墳時代との直接的な結びつきは認められないものであるから、これまで「琉球勾玉」は、民俗資料と考古資料の中間のような扱いがなされてきた。

小稿の結論としては、「琉球勾玉」が製作される経緯は、一八世紀後半の本土において「勾玉」の研究が物産学的にも国学的も盛んになっていた時期に、その大きさと丁字頭という形が琉球に伝えられた結果であると考えた。古墳時代以降には勾玉は姿を消してしまい、再び脚光を浴びるには約千年の時を経た一八世紀にしかないことも事実であろう。よってこの時期に古墳時代の勾玉の形を彷彿させる「琉球勾玉」が誕生してくる背景を、石亭らによる物産学の活動と、「江戸上り」という本土と琉

球の文化交流の中に見出した。しかしながら物証という点では、石亭の周辺には「琉球」の情報が散見されるものの、琉球において本土の情報がどの程度存在するか否かについては確証を得ていない。この点は、今後の大きな課題としておきたい。また、依然「琉球勾玉」の製作地・工房は明らかになっていない。さらにはグスク時代に遡る勾玉の出自をどこに求められるかといえは全く不明である。この点は、今後さらに発掘調査による出土事例の増加を待つしか解決方法はなからう。

もう一つの課題としては「丁字頭」の出現理由についても、古墳時代勾玉を起源としてよいのかという問題が残されている。それは東京国立博物館に所蔵されている「玉ハベル」(資料番号K39052)には、本体と三角布をつなぐ間に「丁子」そのものの実が連ねられているものが存在する。さらに同じく東京国立博物館が所蔵する『琉球国奇観』と題された卷子本には、「掛花 女ノ常ニ首ニ懸ル橘子丁子等ヲ貫キタリ。是ヲ呼テタマト云」という記述と、丁子をいくつか繋げて首飾りのような絵図が記載されている。このような事例を見ると丁子そのものを「玉」として使用する例もあり、これらが丁字頭勾玉の起源となったことも考えられる。

小稿では琉球に存在する「勾玉」の一端に触れることはできたが、まだまだ全容を明らかにする道のりは長そうである。

註

① 「まがたま」の漢字表記については、書名・論文名など固有に使用されて

いるものには「曲玉」を使用しているが、その他はすべて「勾玉」とした。
 ② 徳田誠志「琉球勾玉」『博物館資料図録』関西大学博物館 一九九八・三
 ③ 関西大学工業技術研究所編『関西大学考古学等資料室蔵 石器資料の石質調査』一九九〇・三

④ 神田孝平『日本大古石器考』(英訳)『Notes on Ancient Stone Implements, &c. of Japan』一八七四

⑤ 岸本竹美「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」紀要 沖縄埋文研究 一 沖縄県立埋蔵文化財センター 二〇〇三

岸本竹美「沖縄県出土の玉類に関する考察」『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会 二〇一・一・三

⑥ 田代安定「沖縄県八重山諸島婦人類珠ノ説」『東京人類学雑誌』第一〇巻 一〇六号 東京人類学会 一八九五

⑦ 鳥居龍藏「琉球諸島女子現用ノはけだま及び同地方ノ掘出ノ曲玉」『東京人類学雑誌』第九卷九六号 東京人類学会 一八九四

中井伊與太「琉球諸島発見ノ曲玉ト阿波国発見ノ曲玉」『東京人類学雑誌』第一〇巻一〇七号 東京人類学会 一八九五

⑧ 島田貞彦「琉球勾玉考」『歴史と地理』第三二巻一号 一九三三

⑨ 浜田青陵「沖縄の旅」四・六『ドルメン』五・八 一九三三

⑩ 下地馨「宮古曲玉の研究」『南島』三 一九四四

⑪ 白木原和美「南島二題」『論集 日本原史』吉川弘文館 一九八五

⑫ 岸本義彦・岸本竹美「南海地域の玉文化」『季刊考古学 弥生・古墳時代の玉文化』第九四号 二〇〇六

⑬ 谷川章雄「沖縄県」『日本玉作大観』吉川弘文館 二〇〇四

⑭ 進村真之「斎場御嶽出土品」『図録 大神社展』東京国立博物館編 二〇〇三

- ⑮ 知念村教育委員会『斎場御嶽 整備事業報告書(発掘調査・資料編)』一九九九
- ⑯ 仲原弘哲「ノロ祭祀具の中の玉製品」『沖繩のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖繩県教育委員会 二〇一一年・三
- ⑰ 宮城弘樹「今婦仁阿心理屋恵勾玉について」『今婦仁城跡周辺遺跡Ⅱ—今婦仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』今婦仁村文化財調査報告書代二〇集 今婦仁村教育委員会 二〇〇五年・七
- ⑱ 津波古聰「玉ガール」『沖繩のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖繩県教育委員会 二〇一一年・三
- ⑲ 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇』二〇〇二年・五
- ⑳ 佐々木利和「東京国立博物館所蔵の琉球・沖繩文化財(琉球資料)について」『東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇』二〇〇二年・五
- ㉑ 宮内庁編「明治五年九月十四日」『明治天皇記』吉川弘文館 一九六九年
- ㉒ 小濱亜由美「資料紹介 東京国立博物館蔵『日隅薩巡回採摘品彙圖』」『九州産業大学芸術学芸研究報告』第四三巻 二〇一二年・三
- ㉓ 鹿児島大学附属図書館『木脇啓四郎描く—幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業—』二〇一三年・二
- ㉔ 内川隆志編『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』二〇一三年・三
- ㉕ ヘンリースミス『泰山荘・松浦武四郎の一畳敷の世界』国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館刊 一九九三年
- ㉖ 註①に同じ
- ㉗ 宮内庁書陵部『出土品展示目録 装身具』一九七九年・一一
末永雅雄 島田暁 森浩一編『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第五冊 一九五四

- ㉘ 斎藤忠編「木内石亭関係記事(秋里離島『東海道名所図会』)」「日本考古学資料集成 1 江戸時代」斎藤考古学研究所 一九七九年・一一
- ㉙ 徳田誠志「関西大学博物館所蔵 旧木村兼華堂所蔵の鉄形石—奈良県島の山古墳の出土品—」『関西大学博物館紀要』第三号 一九九七年・三
- ㉚ 夢枕獏『大江戸恐竜伝』巻一〜五 小学館 二〇一四年
- ㉛ 沖繩県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『江戸上り琉球使節の江戸参府』沖繩県史ビジュアル版 二〇〇一年

謝辞

沖繩県立博物館・美術館所蔵品の閲覧にあたっては、同館学芸員園原謙氏、崎原恭子氏、早瀬千明氏にご高配賜った。記して感謝申しあげます。